

「非常時」下の新聞連載4コマ漫画が描く世相

松木 大輔

(玉井研究会4年)

序 章

- I 「非常時」下の新聞連載4コマ漫画の概要
 - 1 近代日本における新聞連載4コマ漫画史
 - 2 研究対象の一覧
 - 3 研究対象の分類
 - II 新聞連載4コマ漫画における「非常時」下の表象の描かれ方
 - 1 政治家の描かれ方
 - 2 軍人の描かれ方
 - 3 資本家・農村の描かれ方
 - III 新聞連載4コマ漫画における「非常時」下の危機意識
 - 1 「非常時」の表れ方
 - 2 対外・国防意識と諸外国の描かれ方
- 結 語

序 章

現在、多くの日刊新聞の最終社会面左上に4コマ漫画が掲載されているが、その定着の起源を繙くと、大正後期・昭和初期に遡ることができる。詳しくは後述するが、昭和初期に新聞各紙が相次いで連載する新聞4コマ漫画ブームが発生し、とりわけ1930年代前半には話題作が集中した。

本論文の目的は、近代日本において新聞に4コマ漫画を掲載することが特に流行していた時期である1933年（昭和8年）から1935年（昭和10年）の3年間に注目し、『東京朝日新聞』・『東京日日新聞』・『読売新聞』に連載された4コマ漫画が、

どのように世相を描いたのかを明らかにすることである。当該時期は、政治史においては、1931年（昭和6年）の満洲事変勃発や1932年（昭和7年）の五・一五事件を背景に、「非常時」と呼ばれた時期であった。同時期の新聞連載4コマ漫画を網羅的に精査することは、豊富な作品群から「非常時」期の世相に迫り得ることを期待させる。

しかし、近代日本におけるかかる漫画の体系的な研究は、この時期に限らずとも、その数は極めて少ない。清水勲による現代まで射程に入れた概説¹⁾や、徐園による戦前の新聞連載子ども漫画の基礎的な研究²⁾は存在するものの、近代日本の新聞4コマ漫画を網羅的に扱った研究は管見の限り存在せず、とりわけ質的な分析や、徐が扱わなかった大人を対象とした漫画の研究は進んでいないのが現状である³⁾。本論文は、既存研究を踏まえつつも、従来の研究では未開拓であった大人を対象とした新聞連載4コマ漫画を中心に内容分析を行うものである。

最後に、本論に先立ち、分析時期である「非常時」期の日本の内外の状況を、その背景となる時期も含め、漫画分析に関連する範囲で概観しておきたい⁴⁾。1920年代末以降、国内の不景気と、「満蒙の権益」が危機に晒される中、政争に明け暮れる政党政治への不信感が高まっていた。1930年代に入ると、対外的には、満洲事変以降、徐々に硬化していた国際世論を背景に、1933年（昭和8年）に国際連盟脱退を通告し、国際的孤立の道を進み始める。一方、国内においては、政党政治への不信感と反比例するように、軍部が急速に政治的発言力を強めていき、また、既成勢力と目された政党政治家や財界人に対するテロ事件が続出する。この時期になると、国家的危機を表す言葉として、「非常時」がメディアで盛んに用いられるようになり、特に1933年（昭和8年）の関東防空大演習は国民に非常時を意識させるものとなった。

資料の引用に際して、旧仮名遣いはそのままとしたが、旧漢字は新漢字に直し、踊り字は省略せずに記した。調査資料について、『東京朝日新聞』は『東朝』に、『東京日日新聞』は『東日』に、『読売新聞』は『読売』に、それぞれ略称で表記する。

I 「非常時」下の新聞連載4コマ漫画の概要

本章では、新聞連載4コマ漫画をその研究対象にするにあたり、当該時期を4

コマ漫画史の中に位置づけた上で、研究対象となった作品の一覧を掲げ、その分類を試みる。

1 近代日本における新聞連載4コマ漫画史

本節では、本論に先立ち、近代日本において新聞連載4コマ漫画がどのように生まれ、定着し、発展していったのかを概観する⁵⁾。

1881年(明治14年)、雑誌『驥尾団子』に北海道開拓使官有物払下げ事件を風刺した6コマ漫画が掲載され、これをもって、西洋の影響を受けたコマ漫画が初めて日本のジャーナリズムに登場したとされる。翌1882年(明治15年)には、『読売』に明治の新聞で初めて漫画欄が設けられ、1890年(明治23年)になると、『時事新報』にて、日本の日刊新聞初となる4コマ漫画が掲載される。1902年(明治35年)に同紙にて、北沢楽天による「時事漫画」欄が創設されると、連載コマ漫画も掲載されるようになる。但し、明治期は4コマの漫画は定着しておらず、作品も4コマに限らなかった。

現在の原型となる毎日掲載される4コマ漫画が登場するのは1923年(大正12年)である。関東大震災直後である同年10月、『東朝』朝刊に、毎日連載の初の4コマ漫画として、織田小星・樺島勝一「正チャンの冒険」が、同月、同紙夕刊にアメリカ漫画であるG・マクマナス「親爺教育」が連載を開始する。さらに、同年11月、『報知新聞』夕刊にて既に8コマ・6コマで週1回連載をしていた麻生豊「のんきな父さん」が「親爺教育」の影響を受け、4コマ漫画で日ごとに連載するようになる。この「正チャン」・「ノントウ」は爆発的人気を得、その後の新聞4コマ漫画のスタイルを決定づけることとなる。特に、「ノントウ」を掲載した『報知新聞』は、震災前においても発行部数40万部でトップの位置にあったが、震災の焼失を免れたことと「ノントウ」人気により、発行部数はのちに70万部に達したという。

1923年(大正12年)以来の「正チャン」・「ノントウ」人気は、新聞各紙に4コマ漫画掲載ブームをもたらし、昭和戦前期は第一次新聞4コマ漫画ブームの様相を呈した。特に、1931年(昭和6年)から1936年(昭和11年)に話題作が集中する。新聞連載4コマ漫画は日米開戦後も続き、1944年(昭和19年)までその姿を消すことはなかった。戦後は、『夕刊フクニチ』の「サザエさん」などをはじめ、地方紙が1946年(昭和21年)から、全国紙が1949年(昭和24年)から連載を再開する。特に、夕刊紙の復活は漫画発表の場を増やし、昭和20年代の第二次新聞4コマ漫

画ブームをもたらすことになった。

序章でも言及したように、本論文で研究対象とする1933年(昭和8年)から1935年(昭和10年)は、新聞連載4コマ漫画史においては「第一次新聞4コマ漫画ブーム」期の、特に話題作が集中したとされる時期と位置付けることができよう。

2 研究対象の一覧

本節では、本論文の研究対象となる新聞連載4コマ漫画の一覧を掲げる。

一覧を掲げるにあたり、まず、調査対象の選定基準を明確にする。本論文にて、調査を行った新聞は、東京における主要3紙といえる『東朝』・『東日』・『読売』である⁶⁾。調査を実施した期間は、1933年(昭和8年)から1935年(昭和10年)の3年間である。また、ここで述べる「新聞連載4コマ漫画」を「新聞というメディアに、同一の主題(主人公)が数回以上にわたって毎日連載された4コマの漫画」と定義した。すなわち、作者が同一であっても主題が毎回変更される漫画や、連載漫画であっても日曜のみの連載など週1回の連載漫画、3コマ・2コマ漫画や文章の挿絵は除いている。

上記の選定基準に合致した作品は、以下の22作品である⁷⁾(表1)。

表1において、読者の対象を大人と子どもに分類するにあたり、「子ども向け4コマ漫画」を「子どもを主人公、または主人公の1人にして創作された漫画作品」と定義した。主人公に着目する定義は、先行研究で徐が定義したものを援用したものである⁸⁾。また、「大人向け4コマ漫画」は、本論文においては、「子ども向け4コマ漫画ではない4コマ漫画」とする⁹⁾。

また、研究対象を時系列で掲載紙ごとに整理する(表2)。

表2について、丸番号は表1と対応しており(以下、作品名には表1の丸番号を付す)、掲載がない時期は表中に斜線を引いた。濃い灰色は子ども向け4コマ漫画を、薄い灰色は大人向け4コマ漫画を示している。

表2から、当該時期においては『東朝』と『東日』は短期連載を好み、『読売』は比較的長期連載を行っていることが分かる。また、それに対応するように、『東朝』と『東日』は比較的小子ども向け漫画を多く掲載しているのに対し、『読売』は大人向け漫画を多く掲載しているといえる。短期・長期連載と大人向け・子ども向け漫画に相関関係があるのは、子ども向け漫画が短期間の連載を想定しているのに対して、大人向け漫画はその多くが日常を描くために長期連載にも耐えう

表1 研究対象一覧

	タイトル	作者	掲載紙	開始日	終了日	回数	掲載場所	対象	分類
①	「当世ヤングマガダム井津茂ひま子夫人」	田中比左良	「東朝」朝刊	1934.1.1	1934.1.6	全5回	社会面	大人	日常
②	「新インソップ物語」	横山隆一・小山西竜画	「東朝」朝刊	1934.1.19	1934.3.31	全60回	「家庭」面	子ども	非日常
③	「赤ノッポ青ノッポ」	武井武雄	「東朝」朝刊	1934.4.5	1934.6.6	全50回	「家庭」面	子ども	半日常
④	「ベツ・ボンボン」	初山滋	「東朝」朝刊	1934.6.9	1934.8.13	全50回	「家庭」面	子ども	非日常
⑤	「ハツマイハチャン」	武井武雄	「東朝」朝刊	1935.4.1	1935.5.31	全50回	「家庭」面	子ども	非日常
⑥	「人生勉強」	麻生豊	「東朝」夕刊	1933.5.3	1934.7.31	全300回	一面	大人	日常
⑦	「ミスターシユウマイ」	田河水泡	「東日」朝刊	1933.1.1※ (1932.2.2)	1933.11.11※	全109回※	家庭面	大人	日常
⑧	「チンドン小僧」	佐藤八郎作・鈴木トシラ画	「東日」朝刊	1933.3.24	1933.6.6	全51回※	家庭面	子ども	半日常
⑨	「〇助漫遊記」	宮尾しげを	「東日」朝刊	1933.6.8	1933.9.2	全59回※	家庭面	子ども	非日常
⑩	「岩さん召集」	和田邦坊	「東日」朝刊	1933.11.15	1933.11.18	全4回	家庭面	大人	日常
⑪	「金さん日記」	志村つね平	「東日」朝刊	1934.1.1	1934.1.31	全27回	社会面	大人	日常
⑫	「ひょう助爺さん」	和田邦坊	「東日」朝刊	1934.5.12	1934.7.5	全39回※	「家庭と趣味」面	子ども	日常
⑬	「狸の武者修行」	宮尾しげを	「東日」朝刊	1934.7.7	1934.8.31	全40回	「家庭と趣味」面	子ども	非日常
⑭	「非常時歩哨線」	田河水泡	「東日」朝刊	1935.1.18	1935.3.12	全36回	「家庭と趣味」面	子ども	非日常
⑮	「アルマの御隠居さん」	久島恒夫・杉瓶夫※	「東日」朝刊	1935.3.14	1935.4.30	全24回	「家庭と趣味」面	大人	日常
⑯	「カバスケ大将」	中野正治	「東日」朝刊	1935.11.1	1935.12.28	全40回※	「家庭と趣味」面	子ども	非日常
⑰	「男やめめの蔵さん」	下川凹天	「読売」朝刊	1932.1.1※ (1933.1.1)	1933.9.30	全240回※	「婦人」面	大人	時事
⑱	「荒馬奥さん」	前川千帆	「読売」朝刊	1933.10.3	1933.12.20	全71回	「婦人」面	大人	日常
⑲	「剛チャンの人生日記」	下川凹天	「読売」朝刊	1934.4.20	1935.4.20	全267回	「婦人」面	大人	時事
⑳	「流線太郎」	前川千帆	「読売」朝刊	1935.6.28	1935.12.31	全111回	「婦人」面	子ども	非日常
㉑	「アワテモノノクマサン」	前川千帆	「読売」夕刊	1931.11.26※ (1933.1.5)	1933.9.26	全144回※	「映画と演芸」面	大人	日常
㉒	「無軌道文娘」※	下川凹天	「読売」夕刊	1933.10.3	1934.1.20	全78回※	一面	大人	時事

「半日常」4コマ漫画とする。これも、当該時期においては子ども向け漫画のみにみられる分類である。本研究においては、③「赤ノッポ青ノッポ」（主人公である鬼の兄弟が日本の小学生として入学し、日本人として教育を受ける）と、⑧「チンドン小僧」（主人公がそのお祖父さんとチンドン屋として活躍する）の2作品が該当する。半日常漫画は、現実の社会が舞台であるため、非日常漫画と異なり、実在の人物が登場したり、実社会で重要な出来事が描かれたりする可能性がある。

第三に、舞台が現実社会であり、作中の設定も現実のものとして無理のない漫画を「日常」4コマ漫画とする。これは、子ども向け漫画と大人向け漫画の両方にみられる分類である。本研究においては、子ども向け漫画では、⑫「ひょう助爺さん」（主人公の少年とお爺さんの、トラブルや日常の面白い出来事を描く）が、大人向け漫画では、⑥「人生勉強」（大卒の青年の就職活動と就職後の奮闘の様子を描く）など計9作品が該当する。日常漫画では実社会の出来事が多く描かれ、また、風刺が入った漫画も散見される。

第四に、日常漫画を前提に、風刺色が特に強く、作者の政治的考えが作品に強く反映されている漫画を「時事」4コマ漫画とする。これは、大人向け漫画のみにみられる分類であり、下川凹天が描いた⑰「男やもめの巖さん」、⑱「剛チャンの人生日記」、⑳「無軌道父娘」の3作品が該当する。

ここで、特に風刺色が強い、特色のある漫画を描いていた下川について、簡単にその作風に触れておきたい¹²⁾。下川は、北沢楽天の一番弟子であり、特にその似顔漫画に定評があった。似顔絵以外にも、政治漫画や風俗漫画を手掛けたが、革新的な思想を強く持っていたことから、風刺漫画などではそのような傾向の作品を描いていた。第Ⅱ章第3節で後述もするが、特に農民問題には強い関心を抱いており、プロレタリア漫画で知られた柳瀬正夢とも非常に親しい交友関係があったとされる。

最後に、以上の4つの分類を対象と現実の反映度を軸に整理する(表3)。実際の全作品の分類は、表1に掲載した。なお、本論文においては、新聞連載4コマ漫画の内容分析にあたり、それに描かれた世相に着目するため、注目すべき4コマ漫画はおのずと日常漫画と時事漫画に集中することになる。

Ⅱ 新聞連載4コマ漫画における「非常時」下の表象の描かれ方

本章では、「非常時」下の新聞連載4コマ漫画がどのように、政治家・軍人・

表3 新聞連載4コマ漫画の分類

		現実の反映			
		無	弱	中	大
対象	子ども	非日常	半日常	日常 (風刺弱)	—
	大人	—	—		時事 (風刺強)

資本家・農村を描いたかを明らかにする。

1 政治家の描かれ方

本節では、「非常時」下の新聞連載4コマ漫画に政治家がどのように描かれたのかを明らかにする。当該時期は、満洲事変以降の「軍部が急速に政治的発言力を強め、「腐敗した政党政治」の人気凋落に反比例して、政治革新の主役として国民の期待を集めた」¹³⁾ 時期であると位置づけられる。政党側は五・一五事件以降、一定数を閣僚として政権に送り込むものの、政権自体は非常時下の中間内閣が終わるまで待つことになった。このような時期において、政治家は新聞4コマ漫画において、どのように描かれたのだろうか。

本節では、まず、政党政治家を中心に抽象的な政治家イメージを明らかにし、次に、具体的な政治家がいかに描かれたのかを確認する。また、軍人と政治家の中間に位置しているといえる軍人政治家についてもこの節で言及をする。

まず、抽象的な政治家イメージについて、政治家が4コマ漫画でその風刺として描かれる際は、「怠惰」「喧嘩」のイメージで描かれることが多く、また、他にも「疑獄」「無能」「軟派」のイメージが見られた。なお、下川凹天の作品（当該時期では⑰「男やもめの巖さん」、⑲「剛チャンの人生日記」、⑳「無軌道父娘」）においては、政治家が描かれる際は、具体名で登場することがほとんどであり、抽象的に政治家が描かれることはほとんどないため、以下の抽象的な政治家イメージ像の記述は大人向け日常漫画、特に、⑥「人生勉強」に集中している。

第一に、「怠惰」イメージにまともられる作品では、主に政治家が議場でだらけており、居眠りばかりしているという点が描かれる。例えば、⑥「人生勉強」において、主人公が議会を傍聴するも、登壇した議員の質問中、閣僚（似顔絵から斎藤実首相、高橋は清蔵相、山本達雄内相らと推定できる）や議員は皆居眠りをし

ており、主人公が「ツカミ合ヒシナイ時ハ眠ッテバカリキルンダナ 起キテルノハ名札バカリジャナイカ」と赤面する¹⁴⁾。主人公の発言からは、政治家は居眠りか後述する喧嘩かのいずれかばかりという意識が表れている。

第二に、「喧嘩」イメージにまとめられる作品では、政治家が喧嘩をしてばかりしている点が風刺の対象となる。これは、同時代における議会の乱闘騒ぎを反映したものであるといえる¹⁵⁾。例えば、⑪「金さん日記」において、喧嘩に巻き込まれている男を主人公が助けに行き、その男が県会議員とわかると主人公が「ナンダケンカガ商売カ」と発言するというものがある¹⁶⁾。喧嘩と県会議員を掛けたものであると思われるが、この落ちが成立する前提には、主人公の「ケンカガ商売」との発言にあるように、政治家は喧嘩ばかりというイメージがある。また、⑥「人生勉強」においても、主人公が議会傍聴に際して、傍聴人の列を見てその関心の高さに感心していたが、傍聴人から「トックミアイガロハデ見ラレルチュウデ来マシタダ」（「ロハ」とは、無料の意）との発言が聞こえ、ずっこけるというものがある¹⁷⁾。

第三に、その他のものとして、「疑獄」・「無能」・「軟派」イメージが見られた。まず、「疑獄」イメージにまとめられる作品では、政治家が不正に手を染めているということが描かれる。例えば、⑥「人生勉強」では、主人公が市議会議員の紹介で役所勤めをするも、その市議が疑獄で収監されたため、突如解雇を宣告される、というものがあつた¹⁸⁾。次に、「無能」イメージでは、例えば、⑥「人生勉強」で市議会議員による面接に際し、市の人口を訪ねられた主人公が回答すると、「ホウソンナニアルノカネ」とメモを取り始めた無知な市議が漫画の落ちとして描かれた¹⁹⁾。また、「軟派」イメージでは、例えば、上述の市議会議員が主人公をやたら待たせるとしたら「歎興税反対ノ陳情ニ来タ女給ノナカニチョイトイイノガ居タネ」という話をしていた、というものがあつた²⁰⁾。

以上、抽象的な政治家像を紹介したが、一方で具体的に政治家が描かれることもあつた。

例えば、⑫「無軌道父娘」では、主人公が新聞記者となり、「国家改造を志す人々」取材する、という筋書きで、安達謙蔵・松岡洋右・久原房之助・平沼騏一郎・山本悌二郎・中野正剛・荒木貞夫の7人に対し、11回にわたってその取材が行われている。同時代における革新系の重要な政治家を連載して取り上げているといえるので、その内容を以下にまとめたい(表4)²¹⁾。

表4 ㊸「無軌道父娘」に描かれた政治家への取材

回次	日付	政治家	内容
48	1933.12. 2	安達謙蔵	主人公が安達に対して、安達は八聖殿の印象ばかりで国民同盟は次第に影が薄くなっていると指摘する。
49	1933.12. 3		国民同盟はファッショではなく議会主義であると主張する安達に対して、主人公は一方で経済統制を推進する国民同盟の姿勢に、議会主義のファッショというのがあるのか、とその矛盾を指摘する。
50	1933.12. 5		主人公が安達の資金力がないことを、毛皮が欲しければ狐を縛るべきなのに、その狐に毛皮を剥ぐと相談するから狐が皆逃げて金の出所がなくなるのだとの説話を交えて皮肉る。
51	1933.12. 6	松岡洋右	政党も軍部も眼中にないという松岡を英雄主義で、ナポレオンの面影さえ感じられると持ち上げるも、ナポレオンはナポレオンでも幽閉中のナポレオンだと落とす。
52	1933.12. 7	久原房之助	政党・資本家・軍部の三位一体を可能ならしめるために一国一党を断行し、政府と資本家を株主にした半官半民の巨大国家株式会社をつくと主張する久原に対し、主人公は政治家でも資本家でもある久原のためにうまくできていると眩く。
53	1933.12. 8		久原は、国家株式会社の利潤で軍部の要求をどしどし入れることで、軍が喜ぶと主張するが、農民の利益配当の質問をされると答えに詰まる。農村を考慮していない久原を見て、主人公は久原が軍部を誤算していると斬り捨てる。
54	1933.12. 9	平沼騏一郎	1932年度には政党と軍部から支持を集めた平沼が、1933年度では「古物」になったことを揶揄する。
55	1933.12.10	山本悌二郎	久原とは異なり、資本家をやめ政治家一本で国家改造に取り組む山本を、主人公は、国家改造は自己にこだわってはならず、その点山本は満点だと評価する。
56	1933.12.12		山本の国家改造論を深掘しても、延々政党更正の話題しか出ない。主人公は「資本家は廃めても政党は廃めない……白紙に戻れない人は——駄目じゃ」と評す。
57	1933.12.13	中野正剛	主人公はナチ式敬礼で中野を訪れ、中野をヒトラーのようだと持ち上げる。日本には皇軍があるために独伊のヒトラーやムッソリーニの真似はできないという中野に対して、主人公は中野の私党が軍のおめがねにかなうようにしていると揶揄する。
59	1933.12.15	荒木貞夫	献納のために荒木を訪ねた主人公は、献納に際して荒木に約束を要求する。その内容は「第一条 閣下の神話を中止される事 第二条 軍部の国家改造論を直に発表する事 第三条 ココが大切ですぞ 昭和維新を断圧維新とトッ違へざる事」というもので、主人公はそれを言い終えるや直ちに荒木の部屋から逃げ出した。

表4について、描かれた7人の政治家と漫画の内容について、簡単に解説を加えておく。第一に、安達は、民政党内にて党人派の総帥として党内に重きをなしていたが、1931年（昭和6年）、政友会との協力内閣運動が失敗すると、翌年、配下の代議士とともに、極東モンロー主義・経済統制を主張する国民同盟を結成した²²⁾。安達に対しては、①国民同盟の影が薄いこと、②国民同盟の姿勢の矛盾、③安達の資金調達の手続きの3点が揶揄された。

第二に、松岡は、1933年（昭和8年）2月のリットン報告書の票決に反対票を投じた際の首席全権であり、当時はその人気の中で、同年12月に立憲政友会を脱党、挙国一致体制確立のためと称して政党解消連盟を結成していた²³⁾。この文脈の中にあつた漫画の内容は、松岡が独りよがりの英雄主義に陥っているというものであつた。

第三に、久原は、当時政友会内に久原派を形成し、政民連携論を唱え、一国一党を主張していた。政界入り前は鉱山開発で豪富を積んだ²⁴⁾。久原に対しては、①巨大国家株式会社構想が資本家でもある久原に都合のよいものであること、②軍部に対する理解不足の2点が指摘された。

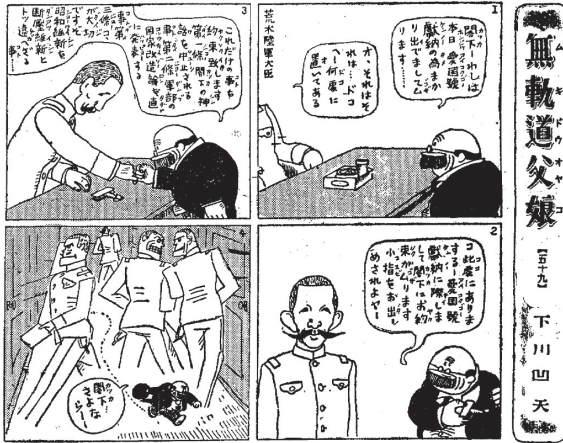
第四に、平沼は、特に満州事変以降は現状打破勢力として、首班候補として軍部からも支持・期待を受けるに至っていたが、1932年（昭和7年）に、自らがファッショ的勢力でないことを強く主張する声明を発していた²⁵⁾。平沼に対しては、1933年度中になると突如「古物」となつたことが皮肉られ、上記の声明で平沼の人氣が急落したことを示唆させる。

第五に、山本は、当時政友会内にあり、直前の犬養内閣では農林大臣であつた。また、議員の傍ら、台湾製糖社長など実業家としての側面もあつた²⁶⁾。山本に対しては、①資本家目線ではなく、政治家目線で国家改造運動に取り組むことを評価するも、②運動が政党前提になっていることを指摘している。

第六に、中野は、民政党内で少壮派代議士のリーダーの1人として活躍していたが、安達の下で強力内閣運動に失敗すると、安達らと共に民政党を脱党、国民同盟を結成した²⁷⁾。中野に対しては、その私党が軍におもねっていることが皮肉られた。なお、漫画掲載後の1935年（昭和10年）、独自の国家統制経済論と強力政治確立の主張を強め、国民同盟を脱退し、翌年東方会を結成している。

第七に、荒木は、当時陸相の任にあつたが、陸相在任中は予算問題などで幕僚将校の失望を買い、青年将校も「口説の将」として失望をするに至り、急速に部内の勢力を失墜させていた²⁸⁾。荒木に対しては、主人公が皮肉をいうという形で

図1



はなく、要望をするという形をとっていたが、その内容は神話の中止（荒木の具体性のない演説を「神話」と表現したものと思われる）、国家改造論の内実を明確にすること、昭和維新に際して「弾圧」しないこと、の3点であった（図1）。

この7人が選ばれたことは、少なくとも同漫画の作者である下川にとっては、「国家改造を志す人々」の代表格がこの7人であると認識していたことを示す。また、このような連載が行われたこと自体、革新系の政治家に注目が集まっていたことの裏返しといえる。上記の連載では、7人すべてがその批判の対象となり（但し、最終的には批判をされるものの、山本のみ1回分を使って肯定的な評価が下された）、その対象となったのは、既成政党である政友会に所属していた久原と山本だけでなく、既成政党から脱党した安達や中野、官僚出身の松岡や平沼、また、軍人政治家である荒木にも批判が行われた。なお、似顔絵について、いずれの政治家も実際に近く描かれ、醜く描かれるようなことがなかった点は注記しておく。

なお、軍人政治家について、上記の荒木のように、大人向け漫画において風刺の対象となる場合はあった。例えば、⑥「人生勉強」において、海軍出身の首相である斎藤実は他の政党政治家と同列に、似顔絵が描かれるなど風刺の対象となった。斎藤の描かれ方は、上述の「怠惰」イメージで紹介したように議事中に居眠りをしているものや、「議會」と書かれた風呂に入り、「ヌルマ湯議會！」とのキャプションとともに、「コリヤイ湯加減ジャ」と発言するものがある²⁹⁾。

後者は、斎藤よりも議会を責める内容といえるが、このように軍人政治家である斎藤も風刺の文脈で、漫画内にその似顔絵が描かれることがあった。

また、4コマ漫画において、具体的に政治家が現れる際は、必ずしも批判を目的としたものだけではないという点も指摘しておきたい。例えば、⑮「ダルマの御隠居さん」では、ダルマ顔の主人公が当時蔵相であった高橋是清に間違えられるというくだりがあった³⁰⁾が、主人公は大臣に間違えられたことを誇らしげに家族に語っており³¹⁾、高橋自体は肯定的に描かれているといえる。他にも、子ども向け半日常漫画である③「赤ノッポ青ノッポ」では、林銑十郎が描かれている（作中では実名が登場しないものの、「ダイジンサマ」と呼ばれていることと、似顔絵から林であることは明らかである）が、主人公である鬼の兄弟の訪問に対しても「ココヘツレテキタマヘ」と動じず、主人公が献納をすると「オオカンシンチャノウ」と反応し、物分かりがよい温厚な大臣として描かれていた³²⁾。

なお、政治家に関連して官僚がどのように描かれたかも触れておく。同時期は、革新官僚が注目を浴びだす時期であるが、革新官僚について直接論じる漫画はなかった。但し、国家官僚ではなく、地方の役人が脇役として登場することはあった。なお、「テクノクラシー」に言及した漫画は2点あった³³⁾。

以上、新聞連載4コマ漫画における政治家の描かれ方を概観したが、ここで注目すべきは、第一に、政治家が風刺の対象となる場合、必ずしも政党政治家に限らず、市議会議員や県議会議員などの地方議員や軍出身の軍人政治家もひとまとめに風刺の対象となっている点である。4コマ漫画内においては、必ずしも政治家に対する批判は政党や政党政治家に限らなかった。また、政党政治や政党という制度を批判の対象とした漫画は確認できなかった。

第二に、政治家は子ども向け漫画にほとんど描かれることがなかったということである。例外的に、上述したように子ども向け漫画である③「赤ノッポ青ノッポ」に軍人政治家である林銑十郎が描かれていたが、政治家が子ども向け漫画に現れるのはこれのみであった。

2 軍人の描かれ方

本節では、新聞4コマ漫画において、軍人がどのように描かれたのかを確認する。上述したように、この時期においては、腐敗した政党政治に代わって、軍部が政治革新の主役として期待された時期であるが、そのような時期において、軍人や軍はどう描かれたのか。

結論を先取りして言うと、大人向け4コマ漫画において軍人や軍という制度が描かれることはほとんどなかった。後述する⑩「岩さん召集」を除くと、当該期間内において軍人・軍を直接笑いの対象としたのは、⑳「アワテモノノクマサン」と⑳「荒馬奥さん」に1作ずつあるのみであった。加えて、前者の内容は、主人公の知らない軍人がいやにニコニコして近づいてきておめでたいと思っていたら、主人公の後ろにいた別の軍人と新年の挨拶をしたためであった、というもので、軍人がニコニコしているというギャップが可笑しさを誘うとはいえ、特段軍人を登場させる必要のないものであった³⁴⁾。後者も、主人公が軍人の育てている菊を鑑賞しに行くと、ケチな名前はつけないと、菊に「愛国号」、「爆弾」、「焼夷弾」、「毒瓦斯」と名付けていたという内容で、やはり相手が軍人である必要がない漫画だった³⁵⁾。

以上のように、大人向け4コマ漫画においては、軍人を笑いの対象としたものはほとんどなく、登場しても作中の会話や風景に登場するなどにすぎなかった。とりわけ、⑥「人生勉強」では、300回にも及ぶ連載の中で、軍人や軍そのものに対する風刺が全くなかったばかりか（但し、本章第1節で言及したように、同作中で斎藤実など軍人出身の政治家は他の政治家と同列に風刺の対象とされた）、それらが話題に上がることも皆無であった。作者によっては、笑いや風刺を主体とする漫画内に軍を登場させることを憚る向きもあったのかもしれない。

このように、新聞4コマ漫画に軍人がほとんど描かれないうち、軍人を主人公にした⑩「岩さん召集」という漫画が存在していたこと、そして、同漫画が全4回³⁶⁾という極めて短期間で連載を終えたことは興味深い³⁷⁾。同作については、連載開始前の予告によると、主人公である岩さんは「後備の兵隊さんに召集」され、その性格は「あわて者のくせに、のろま」であり、「これから毎日上官に叱られるでせう」とある。その風貌もひょろ長い顔をしており、「頭に三四本しか髪の毛がないのに顎には三万五千本からの髭が生えてる」という、コミカルな容姿をしている³⁸⁾。

全4回の内容は、第1回は、読者への紹介を目的としたのか、主人公が読者に向かってまず失敬、と敬礼をするという落ちのないもの³⁹⁾であったが、第2回以降は主人公の失敗談が落ちとなる。第2回は主人公が靴を磨きながら歌を歌っていると、上官にお前は落語家か、と叱られるもの⁴⁰⁾、第3回は上官に敬礼の仕方がなっていないと何度も注意を受け、主人公がしまいには、いい方を探ってもらうと両手で敬礼をしだすというもの⁴¹⁾、第4回は実弾射撃の際、射撃に失敗し

近くにいた牛を撃ってしまうも、ビフテキ（敵とかかっている）を撃ったとおどけてみせるというもの⁴²⁾であった。

以上のように、⑩「岩さん召集」は、軍人の失敗をコミカルに描くものであったが、全4回で突然連載を終える。多くの新聞連載4コマ漫画は、最終回にその回が終わりである旨が書かれるが、本作の4回目にはそのようなことは書かれず、また、表2からも明らかなように1933年（昭和8年）中は、代わる代わる新しい漫画を連載していた『東日』が、本作連載直後は1か月半程度連載漫画を掲載しなかったことから見ても、本作は突然打ち切られたと考えるのが妥当だろう。新聞社が自粛したか、当局からの指導があったか、その理由は定かではないが、1933年（昭和8年）という時期においては、もはや軍人の失敗をコミカルに描く4コマ漫画は、掲載が難しい状態になっていたと推断できるだろう。

一方、子ども向け4コマ漫画においては、大人向け4コマ漫画に比して、軍人が描かれる機会は多かった。⑩「カバスケ大将」は題名の通り、主人公のカバが大将となってその怪力を活かし、敵のオオカミ軍を倒すというものである。人間の軍人に限定しても、例えば⑭「非常時歩哨線」では、兵士が非常時の心構え（第Ⅲ章第1節で詳述）を説く、という役割で登場をしていた。その際、主人公であるタヌキは「ヤッパリ兵隊サンハエライナ」と評したように、兵士は好意的に描かれている⁴³⁾。また、③「赤ノッポ青ノッポ」において、軍人政治家である林銑十郎が好意的に描かれたのは先述したとおりだが、他にも鬼将軍が描かれているなど軍人は登場する⁴⁴⁾。

以上、新聞連載4コマ漫画における軍人の描かれ方を概観したが、風刺の要素が強い大人向け漫画で軍人がほとんど描かれることがなかった一方で、子ども向けの漫画では軍人は好意的に描かれた。但し、軍人政治家については、前節で説明したように、大人向け漫画でも風刺の対象となる場合が見られた。なお、政治家ではない軍指導者が具体名で漫画内に現れることはなかった⁴⁵⁾。以上の政党・政党政治家・軍人政治家・軍人・軍に対する描かれ方を簡単に整理したのが表5である。なお、言うまでもなく、上述した大人向け漫画で好意的に描かれた高橋是清の例など、例外は存在する。

表5にあるように、大人向け漫画において、軍人政治家を含めた政治家こそ風刺の対象になったものの、政党政治という制度に対して直接的な批判を展開したものはなかったこと、また、軍に対しては、風刺の対象とはしなかったものの、軍を持ち上げる漫画もなかったことは強調しておきたい。既成政党の凋落に反比

表5 政党・軍の描かれ方

	大人向け漫画	子ども向け漫画
政党（政党政治）	—	—
政党政治家	否定的評価	—
軍人政治家		肯定的評価
軍人	—	
軍	—	—

例するように、軍部が政治の主役として期待を集めだす時期とはいえ、少なくとも大人向け4コマ漫画においては、政党政治に決別したり、軍に傾倒したりする意識は見られなかった。

3 資本家・農村の描かれ方

本節では、資本家と農村が新聞連載4コマ漫画でどのように描かれたのかを明らかにする。財閥に対する嫌悪と農村の荒廃に伴う社会的不安が広まり、それを理由とするテロ事件も相次いでいた中で、資本家と農村は4コマ漫画内でいかに登場したのだろうか。まず、資本家、特に「有閑マダム」の描かれ方を明らかにし、次に、農村の荒廃がどのように表現されたのかを明らかにする。

まず、資本家については、下川凹天の作品（⑰「男やもめの巖さん」、⑱「剛チャンの人生日記」、⑳「無軌道父娘」）を中心に、特にその放蕩振りが批判の対象とされた。

例えば、㉑「無軌道父娘」では、貧しい暮らしぶりの主人公の娘が、生き別れた金持ちの母と再会し、その財産につられて母の下へ向かうも、金持ちの放蕩振りに辟易し父の下に帰る、というストーリーがある。金持ちの下へ行き、一時期は「貧乏人がバカに観える」と嘯いていた娘だったが⁴⁶⁾、母は、夫の留守中に男を連れ込み、母の夫も妾に熱心であるという状態で、娘は「こんな腐った虚偽な生活よ……さよなら……」と逃げ出し、貧乏な主人公の下へ「あたしには立派なお父さんが有るんだ……」と逃げ帰る⁴⁷⁾。なお、母の愛人の発言に「上流家庭の腐ハイと——有閑マダムの淫蕩振りを徹底的にやっつけてやる」⁴⁸⁾や「上流家庭の腐敗と墮落——中産無産階級の怨嗟の声——斯くして上流階級は表面からでなく内面からポツ落しつつあるのだ」⁴⁹⁾という強烈的な批判があり、上流階級に対す

る下川の強い嫌悪が読み取れる。

以上のように、下川の商品においては、その放蕩振りを中心に、定期的に資本家の批判が展開されていた。また、下川ほどではないにせよ、その他の大人向け漫画でも資本家や有閑マダムが笑いの対象として描かれることはあった。例えば、⑪「金さん日記」では、主人公が小使となった家の奥様に夕刊を渡す際に、「ハイッタ刊・マダム」(有閑マダムとかかっている)と手渡すと「オフザケデナイヨッ」と激怒されるというものがある⁵⁰⁾。また、⑥「人生勉強」では、主人公の先輩が主人公に生きている鴨の首を捻るように要求する際、「資本家ニナツツモリデヤツテクレ」と発言したのがある(鴨を労働者に見立てていると思われる)⁵¹⁾、その発言からは資本家に対する皮肉っぽいニュアンスが伝わる。

以上、新聞連載4コマ漫画に描かれた資本家像を明らかにしたが、ここで注目すべき点は、資本家が描かれる際に、その放蕩振りが大きくクローズアップされている点である。下川の商品に偏っているという留保は必要だが、資本家を批判の対象とする際は、その蓄財や既成政党などとの結びつきが批判されるのではなく、その倫理観の乱れ、特に有閑マダムの放蕩振りが批判の対象となっていた。

次に、新聞連載4コマ漫画における農村の描かれ方を明らかにする。1930年代前半は農村恐慌が深刻化し、とりわけ1934年(昭和9年)は東北で冷害により大凶作となった。農村の惨状は新聞4コマ漫画でどのように描かれたのだろうか。

4コマ漫画で、「貧しい農村」というイメージが描かれたものは後述する⑩「剛チャンの人生日記」を除くと、⑥「人生勉強」と子ども向けの半日常漫画である③「赤ノッポ青ノッポ」にそれぞれ1作品ずつ確認できた。⑥「人生勉強」の内容は、主人公が家庭教師となった家の奥様は「ナデシコ慈善会」を開催しているが、その会話内容を聞いていると、「欠食児童」の話題は早々に切り上げ、すぐに洋服の話題に移るというもので、「有閑マダム」の偽善を皮肉った内容と言える⁵²⁾。また、③「赤ノッポ青ノッポ」は主人公である鬼の兄弟が朝日新聞に「ゴハンヲタベラレナイコドモヲチニ ヤツテモラハウ」と稼いだ金を募金するものである。次のコマで鬼たちは「コレデ オイラモ日本ジンニマケナイゾ」と喜び、読者である子どもたちに募金を呼びかけている内容と捉えられる⁵³⁾。但し、これらの作品はいずれも欠食児童に触れたものだが、直接農村を描いたものではなかった。

4コマ漫画がほとんど農村の惨状を取り上げない中、唯一農村の窮状を直接に

描いたのが^⑩「剛チャンの人生日記」である。この作品では、主人公が岩手県の叔父を尋ねるといふ筋書きで、9回（東北への出発の回を含めると10回）にわたって描写を行った。そのストーリーは、東京が嫌になった主人公が東北に向かうも、むしろ東北の土地と人心の荒廃振りに辟易し東京に逃げ帰り、東京にて義金を呼びかけるといふものである。一連の連載はルポルタージュのように仔細に農村の窮状を伝えるものであった。その内容を表6にまとめた⁵⁴⁾。

農村の惨状が4コマ漫画にほとんど描かれない中、9回にわたって連載を行ったのは、上述したように農村問題に関心が深かった下川ならではといえる。連載の内容は、飢饉や欠食児童、娘の身売りなど当時の農村の社会問題を取り上げたものであるが、作品中で農村に対する同情だけでなく、農民を批判的に描いている作品もある点は注目したい。連載の主眼は、最終回にあるように読者に対する義金の呼びかけといえるが、娘を売り飛ばした農民を「不心得親爺」と罵った点は、「封建的な農村の現状についてかなり批判的であった」⁵⁵⁾下川らしさが表れているといえよう。

以上、農村の惨状を描いた新聞連載4コマ漫画を確認したが、農村の窮状は同時期に深刻な問題となった三原山の自殺などと比べても、漫画内に描かれる回数は少なかった。これは、農村の窮状が笑いや風刺の対象にしにくかったことに由来するためであると考えられる。このことは、農村の窮状が描かれる際は、笑いでなく読者を募金へと促す目的で描かれていたことから明らかだろう。

Ⅲ 新聞連載4コマ漫画における「非常時」下の危機意識

本章では、漫画内に表れた「非常時」の言葉がどのように用いられたかを確認する。また、それに関連して、国防意識や、諸外国への見方など対外意識がいかなるものだったかを明らかにする。

1 「非常時」の表れ方

本節では、当該時期において広く喧伝された「非常時」の言葉が新聞連載4コマ漫画内にどのように用いられたのかを明らかにする。まず、かかる言葉が漫画の主題となった回でいかに言及されたのかを確認したのち、話の本筋とは関係のない場面でも極めて頻繁に用いられていたことを明らかにする。

まず、非常時が漫画の主題となった作品として、⑥「人生勉強」に3作品、⑭

表6 ⑱「剛チャンの人生日記」に描かれた農村の窮状

回次	日付	内容
170	1934.11. 7	東京が嫌になった主人公は、「田舎ハ貧乏デモ東京ノヤウニ殺伐冷酷デナイ……田園ニ詩アリ 人ノ心ニ温カミガアル……」と叔父のいる東北に向かう。
171	1934.11. 8	岩手に着いた主人公が目にしたのは、「笑ワヌ子供」、「疲レハテタル村人」であり、「凶作トハ聞イテイタガコレ程ヒドイトハ」と感想を抱く。稲穂は実が空っぽで皆上を向いて反り返っていた。
172	1934.11. 9	叔父の家に着き食事を出されるも、ご飯だと思ったのはふすまだった。それでも叔母は「コレデ内ナドイ方ナンデス」と言う。
172 (実173)	1934.11.10	叔父から村人の暮らしぶりについて、「村人ノ常食ハ稗八分米二分ノゴ飯ニ山カラトツテキタわらびノ根 草ノ根ノオカズヂャ 一家族デ五十銭以上ノ現金ヲ持ッテルモノハメッタニナイ」と説明を受ける。
173 (実174)	1934.11.13	叔父曰く「野獸ノ食物ヲ人間ガアサツテイル」。野獸と食糧争いになっていることに関し、野獸狩りをしたらと問う主人公に対しては、野獸狩りのための税金20円が無いためできず、貧乏人は野獸に舐められていると言う。主人公は「資本家に労働者ノ利益争奪ト云フノナラ昭和時代デモ未ダ判ルケレド 人間ト野獸ノ木ノ実草ノ根ノ争奪ナンテ全クノ世ノ出来事タァ思ヘンヨ」と呟く。
175	1934.11.14	学校に向かった主人公は教員から欠食児童の説明を受ける。一校内に一日4、5人は必ず、極度の栄養不良と空腹から倒れるとのことで、教員は「倒レタ児童ニ何ヲ与ヘタラヨイカ……高価ナル薬品？否！タダ少シバカリノ……白イおまんまヲ」と続ける。
176	1934.11.15	叔父は村には金になるものではなく、唯一金になるのは娘だけだという。主人公は、150円で娘を売った村人を「コノ不心得爺父メー」と責め立てようとするが、「バンザーイ オメエ違ウラヤマシカロー コレデ肥料代モ払ヘル 年越シモラークニ出来ルダ」と涙を流しながら喜ぶ様子に絶句する。
177	1934.11.16	東京に奉公に出ていた叔父の息子の太郎丸が電車で轢き殺されたとの報を受ける。叔父夫妻はその死を嘆くも電車会社からお見舞いとして300円と25円の花輪を渡される。一転、叔父は「太郎丸……ヨク家ヲ救ツテクレタ」と嬉し涙を流す。
178	1934.11.17	前々回にて娘を150円で売った村人が、見舞金として300円を貰った叔父一家を見、自分の娘の売金よりずっと高いと不満を持つ。主人公はその村人に対して、「バンザーイ……負ケタローコノ不心得親爺メー」と喜ぶが、直後主人公は「ココ嫌ニナツタ見ルニ忍ビナイ……」と我に返る。
179	1934.11.19	東北の惨状に驚いた主人公は東京に逃げ帰る。主人公は、「皆サン以上ノ様ナ訳デスカラ……ドウゾ東北飢饉地ノ兄弟ヲ……一日モ早クオ救ヒ願ヒマス……」と義金募集活動を始めるのだった。

いことを如実に表しているといえる。

一方で、子ども向け非日常漫画である⑭「非常時歩哨線」では、非常時が存在していることを前提に、かかる言葉の定義を説明したものと、その心構えを説くものがみられた。主人公であるウサギとタヌキの会話で、ウサギはタヌキに対して、非常時を「ボクガムリヲ言ツテ君ヲコマラセ」ること、「フダン仲ノヨイ者ガケンカスルコト」と定義する。日本が今非常時であることについては、「日本ノ平和ヲミダサウトシテキル国ガアルカラ」と説明する⁵⁹⁾。

また、非常時の心構えについては、主人公であるタヌキが、兵士から、敵の飛行機が飛んできたなら逃げるのではなく、「ソイツヲタタキオトスコトラ考ヘルノガ、非常時国民ノ心ガケ」である、との説明を受ける⁶⁰⁾。このように、非常時については子ども向けの漫画でも描かれたが、その説明は抽象的なものに終始していた。

以上、4コマ漫画において、非常時がその主題として描かれる場合を確認したが、かかる語が4コマ漫画において登場する際には、話の主題とは関係なしに、口上や比喩的に用いられるものが多く、特に日常生活において危機が迫っている様子を表す語として用いられる用法が目立った。例えば、⑥「人生勉強」において、主人公が下宿のおばさんに失業になったことを相談すると「オヤオヤ今度ハアナタノ非常時デスカ」と言われたり⁶¹⁾、⑰「男やもめの巖さん」において、怪我の手当てをする際に包帯がなかったため「サルマタのキレで我慢してくれ……非常時だ」と言い、猿股で手当てしたりする漫画などがあった⁶²⁾。このように、4コマ漫画内においては、非常時が本来の意味である国家の危機という意味以外に、日常生活の危機を指すものとして用いられ、これは同時代において、かかる語が広く人口に膾炙する語であったことをうかがわせる。

さらに注目すべきは、非常時に焦点を当てた⑭「非常時歩哨線」以外の子ども向け漫画においても、かかる言葉が見受けられることである。②「新イソップ物語」では、親イワシが子イワシにした潜航艇の話を「ヒジヤウジノハナシ」と表現している漫画があった⁶³⁾。⑭「非常時歩哨線」を除くと、子ども向け漫画で非常時の語が表れた漫画はこの漫画のみであったが、明らかに現実社会と関係のない子ども向け漫画においても登場する程度には、かかる言葉が流布していたことが確認できる。

以上、新聞4コマ漫画において、非常時の語が日常生活の危機についても、そ

れを示すものとして比喩的に用いられていたことを確認した。非常時という言葉の内容が曖昧なままに満州事変と五・一五事件以来多用されていたことは先行研究で指摘されており⁶⁴⁾、上述の漫画でもそれを揶揄する内容が見られたが、内実がはっきりしない中で、かかる語が本来の用例以外にも頻繁に用いられていたということを指摘できるだろう。

2 対外・国防意識と諸外国の描かれ方

本節では、当該時期において、対外問題や国防意識がどのように表れ、諸外国がいかに描かれたのかを明らかにする。序章で触れたように、調査時期中の重要な対外問題として、1933年(昭和8年)の国際連盟に対する脱退通告があった。また、同年5月には中国と塘沽停戦協定を締結し、日中間は停戦となった。このように、同時期のほとんどは満州事変終結以降で諸外国との交戦状態にはなかったが、対外問題や諸外国はいかに言及されたのか。

まず、対外問題について明らかにする。結論を先取りすると、新聞4コマ漫画において対外問題が描かれることはほとんどなかった。例外的に、国際連盟脱退に関する4コマ漫画は見られたが、連盟脱退に直接言及した漫画は、②「アワテモノノクマサン」に1本あるのみであった。その内容は、主人公が、大家に日本が連盟を脱退するとどのようになるのか尋ねたところ、大家は経済封鎖をされ、そのために物価が上がると答え、それを聞いた主人公が「コイツは大変だ 大家の爺又店賃を上げて来るぜ」と焦るというものであった⁶⁵⁾。

また、連盟脱退に直接言及したわけではないが、掲載時期と内容から連盟脱退を意識していると思われる漫画が見られた。例えば、⑦「ミスターシュウマイ」では「経済封鎖対策」という副題の回で、主人公が図々しく昼飯を貰いたいと知人に要求し、知人から昼飯をごちそうになると、日本が経済封鎖をされても他人の飯をあてにしていれば困らない、と発言するものがあった⁶⁶⁾。内容としては、同作らしいナンセンスなものであるが、対外問題が新聞4コマ漫画でほとんど描かれなかったことを考えると、このような国際連盟脱退に言及する4コマ漫画の存在は、同問題に対する関心の大きさがうかがえる。なお、この問題に関する漫画について、興味深いのはいずれも連盟脱退や経済封鎖を直接に論じるのではなく、物価の上昇など日常の話題に落とし込んでいる点であり、対外問題と日常をその題材とする4コマ漫画との相性の悪さを感じさせる。

次に、日本の防衛について描かれる作品が数点見られたので紹介する。例えば、

1933年（昭和8年）8月に開催された第1回関東地方防空大演習については、言及した漫画が、⑳「アワテモノノクマサン」や、㉑「男やもめの巖さん」に確認できた。但し、その内容は、例えば、㉑「アワテモノノクマサン」において、上空から陸地を把握させないようにする、という防空演習の意図を主人公が聞き、「それぢやおいらのやうなハゲ頭も頬かむりしなくちゃなるめへか」と発言する⁶⁷⁾などのたわいない内容で、防空演習の心構えを説くなど防衛意識を鼓舞しようとするような作品はなかった。

また、国民の出征を描いた漫画は、㉑「男やもめの巖さん」に1点のみ確認できる。地主に納金ができない女を擁護する形で、主人公が地主に対して「なにしろ亭主は国家のため又我々のために満洲へ出征しているんですからなァ……」というも、地主は「国家は国家だ——俺は俺だ……」とけんもほろろに返答する。女の家族がその発言に対して涙を流すも、主人公は「泣くんぢやないよ……これが世の姿だ……」と慰めるという内容であった⁶⁸⁾。主人公が、国家よりも自分本位に考える地主の考え方について、悲観しつつも一方で「世の姿」とその考えを容認していることは興味深い。

以上、対外問題と日本の国防の話題を取り上げたが、新聞4コマ漫画とは相性が悪いのか、作品数は少なかった。また、その内容も日常のものへと題材を落とし込んで用いており、外交問題を正面から論じた作品は皆無だった。国防について論じる際も、その題材を笑いや風刺に転化しようとしており、「非常時」とはいつでも4コマ漫画内の危機意識は概して薄い、と指摘できるだろう。

次に、諸外国の描かれ方について確認するが、これも対外問題同様、正面から論じられたものはほとんどなかった。諸外国が漫画内に表れる場合は、ほとんど一地名として用いられるのみに過ぎず、肯定的、又は否定的に評価した作品は、㉑「男やもめの巖さん」において、アメリカの消費主義を皮肉る内容が描かれたのみであった。なお、漫画の内容は、男が「アメリカは今や生活の善悪価値の転倒時代です 貯蓄する者働く者が悪で浪費する乱費する者が善である……」と発言し、この言を聞いた主人公は芸者をはべらす金持ちを見ながら「何が何んだか判らない——アイツは大善人だ——チェッ……シャラクセエ」と悪態をつくというものである⁶⁹⁾。

外国の政治家については、ヒトラーが似顔絵を含めたたびたび描かれたが、いずれも話の本筋と離れたところで登場するにすぎず、ヒトラーに対して評価を行っ

ている漫画はなかった⁷⁰⁾。ヒトラーが描かれる例としては、第Ⅱ章第1節で先述した中野正剛に対する風刺の中で用いられたものなどが挙げられる。

上記に関連して、興味深いのは、⑭「非常時歩哨戦」における「敵」の描かれ方である。同作においては、日本の非常時に備えるという作品の設定上、対外的な敵の存在が必須であったが、本章第1節で先述したように、作中で非常時についての説明もされる中、具体的な国名や地名が描かれることはなかった。このことは、非常時の抽象性に拍車をかけることになった。なお、同作以外の漫画においては、対外的な敵の存在を仄めかす表現は見られなかった。

以上、諸外国の描かれ方を確認したが、対外問題同様、漫画内に国名や地名が表れることは少なく、具体的な評価を下した作品はほとんどなかった。日常が題材となりやすい4コマ漫画では外国のことを描写しにくい、という留保は当然に必要なものの、少なくとも同時期の4コマ漫画内においては、特定の国に親近感を覚えたり、また、嫌悪感を抱いたりすることはなかったと指摘できよう。

結 語

本論文では、「非常時」下の新聞連載4コマ漫画がどのように世相を描いたかを解明した。最後に、本論全体を踏まえて確認しておく必要がある点を2点指摘しておきたい。

第一に、調査時期である昭和初期と現代においては、4コマ漫画の内容とその目的に大きな差があることである。

本論で見てきたように、「非常時」期の漫画は、大人向け漫画に限って言えば、国内の話題を中心にその世相を鋭く抉るものだった。現代では、紙面における4コマ漫画の役割は、暗いニュースが多い社会面の中で、新聞を読む人の気持ちを暗く沈ませないようにする、「ビタミン剤」の役割を果たしている、と位置づけられることがあるが⁷¹⁾、昭和初期においては、風刺色が強い作品も多く、上記の位置づけとは真逆に暗い話題を取り上げる作品も目立っており、笑い以上に世相に対する風刺に重点が置かれていたといえる⁷²⁾。

第二に、「非常時」期において、少なくとも大人向け4コマ漫画内では、必ずしも政党政治など既成のものに対する徹底的な批判が行われたり、軍部など革新的なものに対して礼賛したりしたわけではないということである。

確かに、政治家に対しては軍人政治家も含め風刺の対象とされたものの、政党

政治など、根本の制度に対して批判が行われたわけではなかった。また、軍を4コマ漫画で風刺の対象とすることはほとんどなかったものの、一方で軍の礼賛を行っていたわけではない。資本家は漫画内で風刺の対象とはされたものの、頻繁に取り上げられるのは有閑マダムの放蕩ぶりが中心で、既成政党との癒着など本質的な批判はほとんど行われなかった。農村はその凶作が題材として取り上げられることはあったものの、その数は少なく、またそれが既成勢力の批判に関連して描かれることはほとんどなかった。「非常時」の言葉は、その内実が伴っていなかったことは4コマ漫画からも明らかであり、日本が危機的な状況にあると認識していたと言い難かった。さらに、国防や出征など戦時に関する話題もそれが国民を鼓舞させる役割を担っていなかったどころか、笑いの題材として描かれることも多かった。このように、4コマ漫画にて、既成勢力に対する本質を衝いた強い批判が行われることはなく、また、軍や軍事的なものに傾倒する動きも見られなかった。

以上を考慮すると、同時期における4コマ漫画の内容は、政党から軍部へと政治の中心が移っていく過渡期を表すものであったと指摘できるだろう。

- 1) 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』(岩波新書、2009年)。本書において、当該時期の新聞連載4コマ漫画は、著名な作品は紙幅を割いて説明しているものの、それぞれ概説に止まり、内容についての分析はされていない。また、マイナーな作品については、作品名に触れる程度か、全く言及されていないものも多い。
- 2) 徐園『日本における新聞連載子ども漫画の戦前史』(日本橋報社、2013年)。本書では、4コマ漫画に限らず、新聞に連載された子ども漫画について、その時期区分、各時代の社会背景と掲載状況、新聞連載子ども漫画のジャンル・主人公像・表現形式の変遷を解明している。本書では、子ども漫画のみを分析の対象とし、大人向け4コマ漫画は扱わず、また、表現形式の変遷など表面的な研究がほとんどで、時代と深く関連させた分析はされていない。
- 3) 新聞4コマ漫画の研究が進んでいないことは先行研究でも指摘されていることであり、例えば、現代新聞4コマ漫画が描く首相像を研究している水野剛也は「その歴史の深さ、また人気・認知度の高さにもかかわらず、新聞4コマ漫画の内容を実証的・体系的に分析した学術研究は極めて少ない。その政治的内容に光をあてた研究は、なおさら少ない」と指摘している(水野剛也「新聞4コマ漫画が描く野田佳彦首相(前編) 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2011~2012」(『東洋大学社会学部紀要』第56巻第2号、2019年、5-21頁)、6頁)。

- 4) 鳥海靖『日本の近代』(放送大学教育振興会、1996年)と、特に、「非常時」の記述に関しては、『非常時日本』(『昭和二万日の全記録』第3巻)(講談社、1989年)、193頁を参考にした。
- 5) 以下の近代における新聞連載4コマ漫画の歴史については、前掲、清水『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』と、清水勲『漫画の歴史』(岩波新書、1991年)を参考にした。
- 6) 山本武利は、大正中期から昭和初期にかけての東京有力紙の勢力交代の趨勢について、『東京日日』、『東京朝日』という大阪系二紙がシェアをのびし、『報知』、『時事』、『国民』が衰退し、代って『読売』が台頭しはじめたと述べている(山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、1981年)、244頁)。なお、調査対象を選定するにあたり、『時事新報』は、本章第1節で言及したように、北沢楽天による「時事漫画」欄など新聞漫画の発展に大きな寄与をしたものの、調査時期である昭和初期においては、その購読率が衰退傾向にあったため、調査対象紙から外した。
- 7) 補足説明が必要なものには表1中に※印を付してある。

タイトルについて、⑫「無軌道父娘」は、連載途中から「団内とチャラコ・無軌道父娘」に名称が変更された。

作者ついて、⑮「ダルマの御隠居さん」は、予告(『東日』1935年3月13日付朝刊)においては、「久島恒夫、杉柁夫、磯部四郎合作」とあるが、実際の連載では磯部の署名がある作品はなかったため、磯部の名前は表1に掲載していない。

開始日・終了日の日付について、⑦「ミスターシュウマイ」、⑰「男やもめの巖さん」、⑱「アワテモノノクマサン」の3作品については、漫画開始が調査対象期間より前であるため、調査期間外の開始日を記入した上で、括弧内に調査期間内の初出日を掲載した(開始日について、⑰・⑱は、前掲、清水『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』、巻末21頁を参照した。⑦は、筆者確認)。また、⑦「ミスターシュウマイ」は、継続して連載を行っているわけではなく、他の作品と交互に連載をしている。そのため、表1においては、開始日は上記のように記入し、終了日には調査期間内の最終日を掲載した。具体的には、第1期の連載は1932年2月2日～4月20日(調査期間外。初出日と最終日のみ筆者確認)に、第2期の連載は1933年1月1日～3月22日(調査期間内。全62回)に、第3期の連載は1933年9月5日～11月11日(調査期間内。全47回)に行われている。

夕刊の日付について、本論文では、紙面上段の印刷表記に従って記すが、実際は、前日の夕方に発刊されている。

回数については、『東朝』・『東日』・『読売』をもとに、筆者が集計した。⑦「ミスターシュウマイ」、⑰「男やもめの巖さん」、⑱「アワテモノノクマサン」の3作品については、調査期間外においても連載を行っているが、表1の値は調査期間内に掲載された作品回数のみである。また、最終回の回次と実際の掲載回数に齟齬がある作品は、以下の通りである。⑧「チンドン小僧」は最終回の回次は52となっているものの、18に欠番があり(作品自体は、『大阪毎日新聞』1933年4

月20日付朝刊で確認可)、掲載回数は全51回である。⑨「〇助漫遊記」は最終回の回次は60となっているものの、23に欠番があり(作品自体は『大阪毎日新聞』1933年7月11日付朝刊で確認可)、掲載回数は全59回である。⑩「ひょう助爺さん」は最終回の回次は40となっているものの、23に欠番があり、掲載回数は全39回である。⑪「カバスケ大将」は最終回の回次は41となっているものの、22に欠番があり、掲載回数は全40回である。⑫「無軌道父娘」は最終回の回次は80となっているものの、65と78に欠番があり、掲載回数は全78回である。

- 8) 前掲、徐『日本における新聞連載子ども漫画の戦前史』、13頁。
- 9) 原則として、徐の分類に倣って子ども向け4コマ漫画の分類を行ったが、⑬「ダルマの御隠居さん」のみ、徐が子ども向けに分類しているところを大人向けに分類してある。これは、主人公がタイトルにあるように「御隠居さん」のみであるとみなせるからである。徐は、主人公を家族全員とみなしていたと考えたために、子ども向けに分類したと思われる。
- 10) 同作の連載開始前の紙面における宣伝には、「たうとうやつて来た世界の非常時一九三五年を迎えるに当つて、日本中の草も木も石もみんな御国のお役に立たうとしてゐます、ここに山奥の兎と狸までが非常時日本のために命を的に警戒の歩哨線について、日本の平和を乱さうとする者をやつつけようと相談して現れてきました」とあり、宣伝文句からも時流を強く意識した作品であることがうかがえる。(「非常時歩哨線 来春からの連載漫画」『東日』1934年12月28日付朝刊)。
- 11) 田河水泡「非常時歩哨線」No.21『東日』1935年2月16日付朝刊、田河水泡「非常時歩哨線」No.23『東日』1935年2月20日付朝刊など。
- 12) 伊藤逸平『日本新聞漫画史』(造形社、1980年)、85-97頁を参照した。
- 13) 前掲、鳥海『日本の近代』、185頁。
- 14) 麻生豊「人生勉強」No.208『東朝』1934年2月11日付夕刊。
- 15) 近代日本においては、シーメンス事件以降、議場で暴力沙汰が頻発していた。特に、政党内閣時代は、暴力の行使が院外の民衆に体を張っていることをアピールできたことと、取捨不可能な騒擾事件を起こせば、政権側に大打撃を与え、その責任を取らせる形で政権を倒し得る可能性があったことを背景に、政党は議会戦術として実行行使を行っていた。しかし、このような暴力行使を織り込んだ議会戦術は政党内閣の威信を傷つけ、その将来に暗い影を落とすことに繋がった。(村瀬信一『帝国議会』(講談社選書メチエ、2015年)、201-204頁を参照した)。
- 16) 志村つね平「金さん日記」No.14『東日』1934年1月16日付朝刊。
- 17) 麻生豊「人生勉強」No.204『東朝』1934年2月5日付夕刊。
- 18) 麻生豊「人生勉強」No.50『東朝』1933年6月29日付夕刊。
- 19) 麻生豊「人生勉強」No.43『東朝』1933年6月21日付夕刊。
- 20) 麻生豊「人生勉強」No.42『東朝』1933年6月20日付夕刊。
- 21) 下川凹天「無軌道父娘」No.48『読売』1933年12月2日付夕刊。
下川凹天「無軌道父娘」No.49『読売』1933年12月3日付夕刊。
下川凹天「無軌道父娘」No.50『読売』1933年12月5日付夕刊。

- 下川凹天「無軌道父娘」No.51『読売』1933年12月6日付夕刊。
 下川凹天「無軌道父娘」No.52『読売』1933年12月7日付夕刊。
 下川凹天「無軌道父娘」No.53『読売』1933年12月8日付夕刊。
 下川凹天「無軌道父娘」No.54『読売』1933年12月9日付夕刊。
 下川凹天「無軌道父娘」No.55『読売』1933年12月10日付夕刊。
 下川凹天「無軌道父娘」No.56『読売』1933年12月12日付夕刊。
 下川凹天「無軌道父娘」No.57『読売』1933年12月13日付夕刊。
 下川凹天「無軌道父娘」No.59『読売』1933年12月15日付夕刊。
- 22) 伊藤隆「安達謙蔵」『国史大辞典』第1巻(吉川弘文館、1979年)、228-229頁。
 23) 三輪公忠「松岡洋右」『国史大辞典』第13巻(吉川弘文館、1992年)、100-101頁。
 24) 中村隆英「久原房之助」『国史大辞典』第4巻(吉川弘文館、1984年)、850頁。
 25) 伊藤隆「平沼騏一郎」『国史大辞典』第11巻(吉川弘文館、1990年)、1067-1068頁。
 26) 木坂順一郎「山本悌二郎」『国史大辞典』第14巻(吉川弘文館、1993年)、230頁。
 27) 有馬学「中野正剛」『国史大辞典』第10巻(吉川弘文館、1989年)、636-637頁。
 28) 高橋正衛「荒木貞夫」『国史大辞典』第1巻(吉川弘文館、1979年)、331-332頁。
 29) 麻生豊「人生勉強」No.210『東朝』1934年2月14日付夕刊。
 30) 杉柎夫「ダルマの御隠居さん」No.18『東日』1935年4月20日付朝刊。
 杉柎夫「ダルマの御隠居さん」No.21『東日』1935年4月25日付朝刊。
 31) 杉柎夫「ダルマの御隠居さん」No.23『東日』1935年4月27日付朝刊。
 32) 武井武雄「赤ノッポ青ノッポ」No.39『東朝』1934年5月21日付朝刊。
 33) 下川凹天「男やめめの巖さん」『読売』1933年2月9日付朝刊。
 前川千帆「アワテモノノクマサン」『読売』1933年2月23日付夕刊。
 34) 前川千帆「アワテモノノクマサン」『読売』1933年1月5日付夕刊。
 35) 前川千帆「荒馬奥さん」『読売』1933年11月14日付朝刊。
 36) 『東日』においては、4回分のみの掲載であるが、姉妹紙である『大阪毎日新聞』には、5回目が確認できる。その内容は、上官から物に動じないようにという講話がある中、主人公が居眠りをするが、上官にその態度を叱られると、動じないのだと返事をする、というものである(和田邦坊「岩さん召集」『大阪毎日新聞』1933年11月21日付朝刊)。なお、『大阪毎日新聞』上でも、この日以降に同漫画を確認することはできないが、『東日』同様に、この日の漫画に完結であることを示唆させる文言はない。
- 37) 打ち切りを思わせる極端な短期間の連載自体は、他にも見られ、当該期間においては表1にあるように、①「当世ヤングマダム井津茂ひま子夫人」が5回で連載を終了させている。
 38) 「岩さん応援の辞」『東日』1933年11月14日付朝刊。
 39) 和田邦坊「岩さん召集」『東日』1933年11月15日付朝刊。
 40) 和田邦坊「岩さん召集」『東日』1933年11月16日付朝刊。
 41) 和田邦坊「岩さん召集」『東日』1933年11月17日付朝刊。

- 42) 和田邦坊「岩さん召集」『東日』1933年11月18日付朝刊。
- 43) 田河水泡「非常時歩哨線」No.34『東日』1935年3月8日付朝刊。
- 44) 武井武雄「赤ノッポ青ノッポ」No.19『東朝』1934年4月27日付朝刊。
- 45) 軍人政治家を除く具体的な軍の指導者が4コマ漫画内に一切登場しなかった点は、日中戦争勃発後の国策グラフ誌『写真週報』の表紙において軍指導者がほとんど現れることがなかった点と共通している。同雑誌では、米内光政・東條英機らが首相など政治家として表紙を飾ることはあっても、軍指導者が単独で表紙に現れたのはシンガポール陥落後の山下奉文のみであった（玉井清「鬼畜米英への道」（玉井編『写真週報とその時代（下）』、慶應義塾出版会、2017年）、333頁）。このことは、戦前において政治家ではない軍指導者がメディアの主要な題材となりにくかった可能性がある、という点で示唆的である。
- 46) 下川凹天「無軌道父娘」No.37『読売』1933年11月16日付夕刊。
- 47) 下川凹天「無軌道父娘」No.44『読売』1933年11月26日付夕刊。
- 48) 下川凹天「無軌道父娘」No.41『読売』1933年11月23日付夕刊。
- 49) 下川凹天「無軌道父娘」No.43『読売』1933年11月25日付夕刊。
- 50) 志村つね平「金さん日記」No.17『東日』1934年1月19日付朝刊。
- 51) 麻生豊「人生勉強」No.174『東朝』1933年12月22日付夕刊。
- 52) 麻生豊「人生勉強」No.97『東朝』1933年9月6日付夕刊。
- 53) 武井武雄「赤ノッポ青ノッポ」No.39『東朝』1934年5月21日付朝刊。
- 54) 下川凹天「剛チャンの人生日記」No.170『読売』1934年11月7日付朝刊。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.171『読売』1934年11月8日付朝刊。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.172『読売』1934年11月9日付朝刊。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.172『読売』1934年11月10日付朝刊（紙面には172とあるが、実回数は173である）。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.173『読売』1934年11月13日付朝刊（紙面には173とあるが、実回数は174である）。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.175『読売』1934年11月14日付朝刊。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.176『読売』1934年11月15日付朝刊。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.177『読売』1934年11月16日付朝刊。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.178『読売』1934年11月17日付朝刊。
下川凹天「剛チャンの人生日記」No.179『読売』1934年11月19日付朝刊。
- 55) 前掲、伊藤『日本新聞漫画史』、95頁。
- 56) 麻生豊「人生勉強」No.211『東朝』1933年2月15日付夕刊。
- 57) 麻生豊「人生勉強」No.212『東朝』1933年2月19日付夕刊。
- 58) 麻生豊「人生勉強」No.213『東朝』1933年2月20日付夕刊。
- 59) 田河水泡「非常時歩哨線」No.2『東日』1935年1月19日付朝刊。
- 60) 田河水泡「非常時歩哨線」No.34『東日』1935年3月8日付朝刊。
- 61) 麻生豊「人生勉強」No.214『東朝』1934年2月21日付夕刊。
- 62) 下川凹天「男やもめの巖さん」『読売』1933年9月13日付朝刊。

- 63) 横山隆一案・小山内竜画「新イソップ物語」No.17『東朝』1934年2月7日付朝刊。
- 64) 上野隆生「[「非常時」・「準戦時」・「戦時」1930年代日本の位相]」(『和光大学現代人間学部紀要』第9号、2016年、105-121頁)。
- 65) 前川千帆「アワテモノノクマサン」『読売』1933年2月25日付夕刊。
- 66) 田河水泡「ミスターシュウマイ」『東日』1933年3月1日付朝刊。
- 67) 前川千帆「アワテモノノクマサン」『読売』1933年7月20日付夕刊。
- 68) 下川凹天「男やもめの巖さん」『読売』1933年3月18日付朝刊。
- 69) 下川凹天「男やもめの巖さん」『読売』1933年1月9日付朝刊。
- 70) なお、同時期において、ヒトラーが1コマの風刺漫画や挿絵にどのように描かれたかは岩村正史『戦前日本人の対ドイツ意識』(慶應義塾大学出版会、2005年)、169-191頁に詳しい。
- 71) 日本新聞協会「めざせ! 新聞博士」〈<https://nie.jp/child/qa/index.html>〉(2019年11月19日閲覧)。
- 72) この点は、4コマ漫画連載開始前に新聞紙上で掲載される宣伝を見ても明らかである。例えば、㉔「無軌道父娘」は、連載開始前の宣伝文句に「一見自由奔放と見らるる主人公の口を借りて、現代日本の政治、経済、其他あらゆる社会的弊害に向つて辛辣なる解剖の筆を振はんとするもの。〔……〕画中自ら諷刺あり、比喩あり、筆者独得の正義感は読者に『脱線真理』の醍醐味を味はずであらう。」とある(「二つの新連載漫画」『読売』、1933年9月29日付夕刊)。また、㉖「人生勉強」は、連載開始に際して、「好漢只野君の努力、失敗、喜び、悲しみは、単に一場の笑ひではなく現代世相の一面を如実に語るもので、必ずや読者諸君の眞実な同感を得ることを期待します。」と挨拶している(「連載漫画「人生勉強」明日の本紙より掲載」『東朝』、1933年5月2日付夕刊)。このように、4コマ漫画においては、笑い以上に世相を描くことを重視していた。